（別紙２）

審査の結果の要旨　氏名　西村　清和

本論文は、「ことばとイメージ」の交叉について、ことばとイメージという異なるメディアによる表現がそれぞれいかなる美的効果を持つのか、という修辞学的観点から考察したものである。

本書は大きく 4 部に分かれる。第 1 部「ことばとイメージ」は、言葉とイメージをめぐる原理的な問題を扱う。第 1 章は、「ことば」の意味をめぐるいわゆる「ピクチャー・セオリー」を批判しつつ、「ことば」に付随するイメージとは、ある語が社会的・文化的に備えている意味素の集合のなかから、いくつかの意味素が文脈に応じて現実に選択されて表現された（「現働化」された）ものである、と捉える。その上で、第 2 章は言語的隠喩において心的イメージの果たす錯綜した役割、および視覚的イメージにおける隠喩の不可能性を論じ、第 3 章は詩と絵画の比較論（パラゴーネ）の検討を通して、特に「ことばの意味」に還元されることのない「絵画的イメージ」のあり方に焦点を当てる。

第 2 部「小説の映画化」（第 4 章、第 5 章）は、まず小説の語りの「叙法」ないし「視点」を〈全知〉の視点、〈情況〉の視点、〈ともにある〉視点、〈外部から〉の視点に分類した上で、映画の映像がこれらの視点をいかに実現したのか、映画の「文法」に踏み込んで解明する。

第 3 部「『物語る絵』のナラトロジー」（第 6 章、第 7 章）は、西洋の中世から近代にいたる絵画のなかに、ナラトロジーのいう「語りの視点」の 3 つのパターン、すなわち中世の超越的・遍在的な〈全知〉の視点、ルネサンスの超越論的・透視図法的な〈全知〉の視点、近代の情況内在的な〈ともにある〉視点を明らかにする。とともに、筆者はこの 3 つ目の〈ともにある〉視点の確立が、観者の物理的に占める〈視角〉と美的戦略としての語りの〈視点〉の分離を可能にしたことを強調し、両者を同一視することによって従来生じてきた語りの〈視点〉をめぐるさまざまな理論的アポリアを解消する。

第 4 部「小説と挿絵」（第 8 章、第 9 章）は、第 3 部で確認された物語る絵の「語りの視点」の変化を、15 世紀以来の挿絵の歴史に即して改めて検討する試みであり、第 9 章では視野を日本へと広げ、江戸の戯作とその挿絵との対比を通して、近代日本において小説と挿絵に〈ともにある〉視点が定着した過程を論じる。

筆者は膨大な先行研究を渉猟しそれを逐一批判する形で自らの論理を構成しており、それゆえに議論は説得的である。もとより、筆者が理論的に分析する物語の叙法の「パターン」が、はたして文学史的・美術史的にどのような展望を開きうるかは、今後の課題として残されている。だが、「ことばとイメージ」をめぐる従来の学説のアポリアを一つ一つ解きほぐす手腕は見事であり、今後のこの主題に関する研究にとっての最重要文献となることは間違いない。よって、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに値すると判断する。